

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

(やれることは全部やる)

受賞者 ほうじん おおひらさんみなみさんろくとも かい
NPO法人太平山南山麓友の会
とちぎけんとちぎし
(栃木県栃木市)

■ 地域の沿革と概要

栃木県栃木市は、東京から約70km、
総面積331.57km²、人口約164,000人
(平成26年4月現在)で、栃木県の南
部に位置し、茨城、栃木、群馬、埼玉
の4県の県境が接する地域である。

地勢としては、西に三轟山、
太平山、南には渡良瀬遊水地などの
シンボリックな自然景観と、渡良瀬川、
思川などの豊かな水資源を有してい
る。また、北東部から南東部にかけて
は関東平野に連なる平坦地が広がり、
県内有数の農業地帯でもある。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大平町西山田地区は、栃木市の
ほぼ中央に位置し、気候は年間を通
じて温暖で晴天率が高く、大平町南
東部の平坦地では米・麦・大豆の生
産が盛んである一方、太平山系の南
山麓に位置する西山田地区は観光農
園が集積する北関東最大規模の「大
平ぶどう団地」が形成され、ぶどう
の収穫シーズンやハイキングシーズ
ンには多くの行楽客が訪れる。

第1表 地区の概要（西山田地区）

事 項	内 容
地区の規模	大字単位の集団
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	34.7%
	総世帯数 366戸
	総農家数 127戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 27戸
	1種兼業農家 24戸
	2種兼業農家 56戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 701ha
	耕地面積 140ha
	田 67ha
	畑 13ha
	耕地率 20.0%
	農家一戸当たり耕地面積 1.1ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 地域の賑わいと荒廃

西山田地区は、大中寺や清水寺等の仏閣を有する太平山南山麓に開けた、古くから住民の結びつきの強い、伝統と賑わいのある地域であった。戦後、大平町平野部が基盤整備に伴い開けていく一方、西山田地区は整地が遅れ大平町の「3大へき地」に数えられるようになった。



写真1 太平山から望む西山田地区

昭和40年代から始まった土地改良事業により広域農道が横断し、圃場の整備、灌漑施設の設置がされた。その後大規模なぶどう団地が形成され、多くの行楽客が訪れるようになり賑わいが戻ってきた。しかし、地域の賑わいはそう長くは続かず、景気の停滞は客足に直結し、農家の収入は減少していった。自然豊かな集落だが、若者は都市に働きに出るようになり、過疎化、高齢化により地域の行事は行われず、山野は荒れ、伝統は忘れられていった。

この姿に「3大へき地」を覚えている者たちは、子供たちに何を残してやれるのだろうか、と疑問を持ち始めた。

イ 藤野義之さんと仲間たちの決意

このような状況に危機感を持った有志が、町が作った第2公民館の庭が殺風景だったため、休日を利用し、庭石の運び入れや桜の植栽を行った。この取り組みをきっかけに西山田のあるべき姿を語り合った。その中でリーダー的存在である藤野義之氏、藤野氏の思いに心打たれた現理事長の小林明彦氏や現副理事長の本橋亮成氏は、西山田に来た嫁が「この土地に来て良かった」と思える地域にしたい、そして子供たちに太平山の美しい自然を残そうと決意した。

そうして藤野氏たちは、平成15年に西山田地区3自治会に呼びかけ、荒れた山野の再生に取り組み始めた。子供たちに伝統ある太平山の美しい自然を残そう、その思いは住民の結びつきの再生にも繋がっていった。

ウ 現在の活動母体であるNPO法人太平山南山麓友の会の立ち上げ

平成17年に「西山田地域活性化研究会」を発足させ、「ケガと弁当は自分持ち」の緑化・美化ボランティア活動を開始した。そのような折、大平町では勤労者屋外活動施設「かかしの里」の地元による管理が検討され、西山田地域活性化研究会が受託することとなった。その後、平成19年に、「美しい自然を将来に残そう」をスローガンに大平町認証第1

号となる「NPO法人太平山南山麓友の会」（以下、「南山麓友の会」という。）を発足、初代理事長には満場一致で藤野義之氏が就任した。

こうして、南山麓友の会による太平山南山麓の緑化・美化、史跡や自然環境の保護、農産物のオーナー制度等の取り組みがスタートした。

エ 南山麓友の会の新たな体制と挑戦

2代目会長を引き継いだ小林明彦氏は、多くの人を迎え入れ地域経済を活性化させようと太平町観光ぶどう園協議会事務局を引き受け観光農園のPRや接客マナー向上に取り組んだ。さらに、ぶどうのオフシーズンにも西山田地区へ気軽に遊びに来てもらえるよう太平山南山麓をフィールドとしたイベントやトレッキングにも力を入れている。

南山麓友の会の取組は地域全体に伝わり、自分でできることは行政に頼らず自ら行動することが当たり前となり、困ったときは南山麓友の会に相談するようになっていった。単なる便利屋ではなく、共に行動してくれる地域の相談役、それが南山麓友の会である。

(2) むらづくりの推進体制

ア 組織体制

南山麓友の会は、平成19年8月に設立され、現在会員は60名。理事（理事長1名、副理事長3名、理事4名）のうち2名が女性。かかしの里に事務局を置き活動を行っている。

設立当初は、藤野理事長が各種取り組みを管理していたが、事業が増えるに従って一人ですべてを管理することが困難になってきたことから、これまでの取り組みを部として整理し、それらの部に責任者を配置し、平成21年の総会で理事長が交代した際に、農地部・緑化部・花部、オーナー制度部、イベント部を立ち上げ、後にトレッキング部を立ち上げた。



イ 各部の活動内容

① 農地部・緑化部・花部（12名）

大中寺・清水寺の森、西山田林道・保全林の整備、太平山南山麓の花の植栽など、地域の美化活動や農地の保全活動を実施。南山麓友の会のスローガンを具現化するために設置された組織。

② トレッキング部（15名）

ハイキングコースの整備のほか、毎年、春と秋に「太平山系トレッキング」を開催。また随時ガイドを行うなど、太平山の自然や地域の

歴史等についてガイドを行う組織。

③ オーナー制度部（11名）

7つの農業体験「おおひらの^{ななふしぎ}七富賜技体験」を3月～11月にかけて実施し、都市住民との交流を行う組織。

④ イベント部（15名）

8月末に「おおひらぶどうまつり」、春の「万本桜を観る会」を開催し、地域の女性会や栃木県シルバー大学校南校の協力を得ながら、住民の力だけでお祭りを開催する組織。

ウ 南山麓友の会をハブとするネットワーク

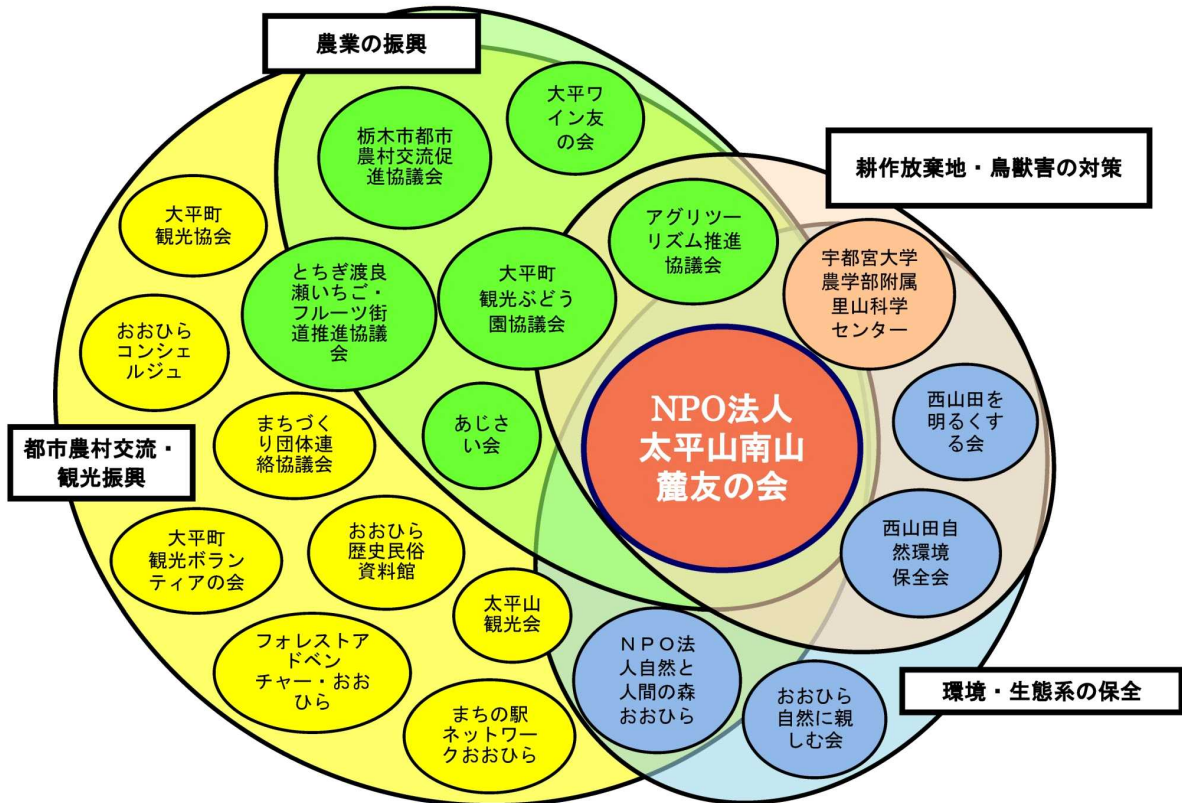
① 連携団体

団体名	南山麓友の会との連携内容
大平町観光協会	栃木市大平町全般の観光案内。西山田地区周辺の観光案内については南山麓友の会に依頼。
まちづくり団体連絡協議会	地域興し団体、支援団体の連合体であり、大平町区長の提案により設立。南山麓友の会もメンバー。
まちの駅ネットワークおおひら	大平町地内のまちの駅の連携団体。南山麓友の会もメンバー。
おおひらコンシェルジュ	地域の「おもてなし」向上のため、研修を実施しており、南山麓友の会の会員も多く受講。南山麓友の会は観光ぶどう園主にも受講を推奨。太平山南山麓フルーツ狩り&里山観光を紹介するWebサイト「フル里ポータル」を作成。
太平山観光会	太平山周辺の一体的な観光案内。太平山周辺振興を目指す協議会を6団体で設立予定。南山麓友の会もメンバー。
大平町観光ぶどう園協議会	大平ぶどう園地の観光宣伝、誘客対策、研修会開催などを実施。平成21年から南山麓友の会が事務局を務める。太平山周辺振興を目指す協議会を6団体で設立予定。
大平ワイン友の会	ぶどう農家の若手有志を中心に、ワイン品種育成の研究を行う。南山麓友の会の会員であるぶどう農家の一部がメンバー。
大平町観光ボランティアの会	大申寺、歴史民俗資料館の歴史・観光ガイドを実施。太平山系トレッキング時などで連携。
西山田を明るくする会	西山田3自治会の連合体。各自治会が、南山麓友の会活動の周知や地元調整、ぶどうまつりの協賛等を行い、南山麓友の会の活動を支援。
西山田自然環境保全会	農地・水・環境保全対策を実施。水路清掃や耕作放棄地の復旧で連携し、再生した農地は七富陽技体験に活用。
おおひら自然に親しむ会 (解散)	南山麓友の会がほたるの里の保安全管理を引き継ぐと共に、自然環境保全活動を西山田地区全域に展開。
NPO法人 自然と人間の森おおひら	自然の素材を使ったものづくり体験、昆虫教室やアウトドア活動などの自然体験、しいたけオーナー制を実施。南山麓友の会の活動の紹介や情報提供などで連携。太平山周辺振興を目指す協議会を6団体で設立予定。
フォレストアドベンチャー・ おおひら	アドベンチャーフィールドを提供。相互にイベント参加や情報提供などで連携。太平山周辺振興を目指す協議会を6団体で設立予定。
おおひら歴史民俗資料館	太平山周辺振興を目指す協議会を6団体で設立予定。南山麓友の会の活動の紹介や情報提供などで連携。
アグリツーリズム推進協議会	黒大豆オーナー制度を実施。PR活動で連携。
宇都宮大学農学部附属里山科学 センター	センターで柴田事務局長が鳥獣管理士を取得したことをきっかけに、野生鳥獣管理技術者養成講座の現地実習を地区内で実施。
あじさい会	大平町観光ぶどう園協議会内の女性を中心メンバーの組織。ぶどうジャムやぶどうジュースを製造。ジャム・お菓子作り体験などで連携。
とちぎ渡良瀬いちご・フルーツ 街道推進協議会(栃木県下都賀農業 振興事務所、他)	足利市から小山市までの国道50号線沿いを中心に、いちご、梨、ぶどうなどのフルーツや直売所等を食の街道としてPR。街道ツアー等で連携。
栃木市都市農村交流促進協議会 (下野農業協同組合、他)	平成26年度都市農村共生・対流総合対策交付金を活用した都市農村交流の取組で連携する予定。

② 行政

栃木市(大平総合支所)	かかしの里の運営を南山麓友の会に委託。南山麓友の会活動を支援。
-------------	---------------------------------

第2図 むらづくり推進体制図



エ 会員の経験や趣味を生かし、楽しく活動を展開

障害を持った会員が自分の特技を生かして南山麓友の会のHPを担当しているほか、写真、トレッキングなど会員個人の経験や趣味特技を生かし、会員自身が楽しみながら活動を行っている。

都市部在住の若者1名が、イベント等を通じて南山麓友の会会員となり、就農を志し耕作放棄地を借り受け、ブルーベリー栽培に取り組んだ。今では新たな農地を買い求め、西洋野菜とワイン用ぶどうの栽培など規模拡大を図っており、今後が期待される。

さらに、太平山の景観や自然に魅せられ、県外から活動に通う会員もあり、様々な人々が集い活動が進んでいる。

オ 女性の活躍

女性会員は3名で、地元2名（うち1名ぶどう農家、1名非農家）、地区外1名で、地区外の女性を含めた2名が理事として活躍している。地区外の女性は元オーナー制度の参加者であったが南山麓友の会の取組そのものに魅了され、自ら会員となり奮闘している。

ジャム・お菓子づくり教室の開催やイベントでの案内・出店など、女性の活躍はめざましく、車社会の当地区において、イベントの開始時間

を電車の時間に考慮して設定するよう提案するなど、繊細な感覚で企画内容の輝きが増すことも多い。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

南山麓友の会は、「来訪者を温かく迎えるまちづくりと地域経済の発展に寄与する」ことを目標と定めており、環境美化活動やトレッキングガイドサービス、農業体験オーナー制度などは、そうした思いを実現する手法となっている。取り組みの結果として、地域内への来訪者やぶどう狩りへの参加者が増加し、観光ぶどう園の多くで後継者が育つなど、南山麓友の会の取り組みが地域農業の大きな支えになっている。

そのエネルギーは、なんとといっても「地域の絆と、地域を自分たちの力で守っていこうという意欲」である。地域自らが立ち上がり、地域の美化活動等から始まった取り組みが交流イベントやオーナー制度など、都市農村交流の取り組みにつながっていったことは、地域資源を活かした農村活性化のモデルとなるものである。

また、自ら行動する南山麓友の会の取組は地域全体の共感を得ており、行政に頼らずに「自分で出来ることは自らやろう」という意識が地域に定着している。

2. 農業生産面における特徴

(1) ぶどうまつり復活による農業・農村の理解促進

「ぶどうまつり」は大平町の代表的な行事であったが、地元でのトラブルが原因で開かれなくなっていた。平成19年、ぶどう農家からの要望もあり、8年間途絶えていたぶどうまつりを南山麓友の会と地域が連携し復活させた。開催に当たっては行政の直接的な支援を受けておらず、そのことが会員や住民たちの大きな自信につながっている。



写真2 ぶどうまつりの様子

また、平成21年から事務局を担っている大平町観光ぶどう園協議会の取り組みとして、都市住民を対象としてぶどうの袋かけ体験や収穫体験、地元女性組織協力によるジャムやお菓子作り体験を実施している。

(2) ぶどう狩りツアー開催による地元農家の収入向上

平成25年度はツアー企画会社と連携し、新たなぶどう狩りツアーにも力を入れた。ツアー拠点のかかしの里では、農産物の直売が好評で売り上げ増加と共に農家の収入も向上し、ツアー継続の期待が高まっている。

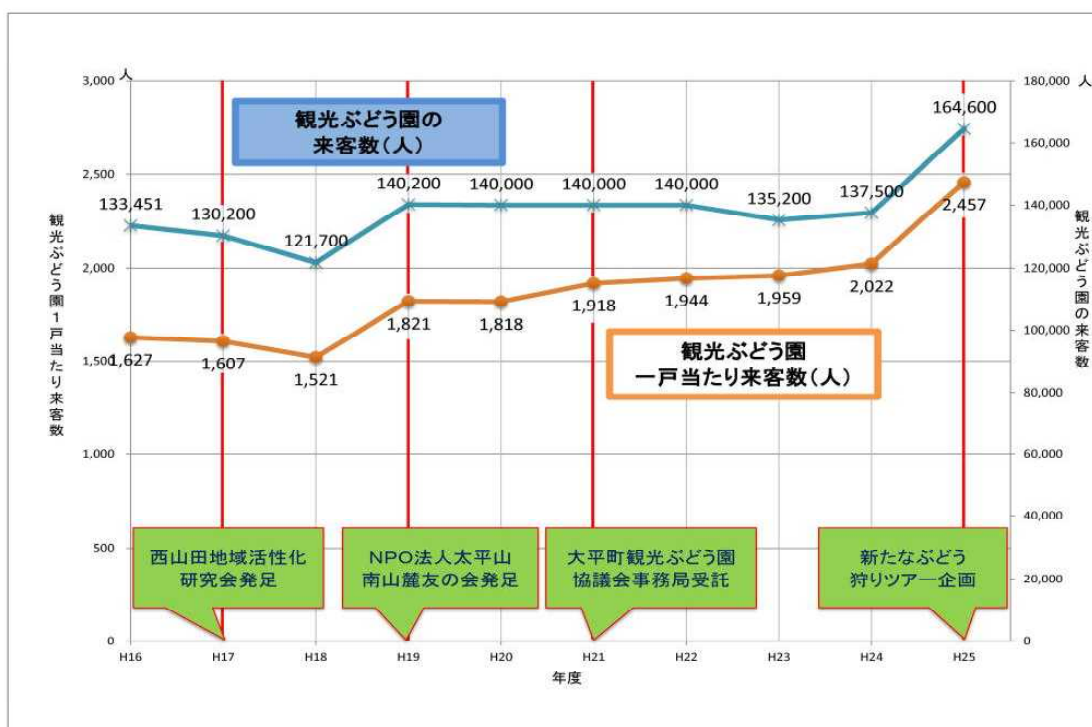
地域や団体との連携により、観光案内や商業ベースのPRが迅速かつ効果的に行われ、観光ぶどう園の来場者数も平成18年の121,700名から平成25年には164,600名に拡大し、ぶどう農家の生産意欲の向上を始め地域農業の振興にも大きく貢献している。

また、その結果として、観光ぶどう園の多くで後継者が育ってきている。



写真3 ぶどう狩りの様子

第2表 大平町西山田地区における観光ぶどう園の来客数の推移



(3) ぶどうの6次化による地域ブランド力の向上

ぶどうを素材とした加工品の製造・販売が行われ、大平のぶどうという商品ブランド力が向上しつつあり、農家の生産・販売意欲も高まっている。

現在、ココ・ファーム・ワイナリーへの供給を基本としてワイン用品種の栽培にも取り組み、高齢者の収入源として期待される。将来的には自前のワイナリーを整備し、大平ブランドのワインを提供していくことが地域の夢である。



写真4 ジャム作りの様子

(4) 鳥獣被害対策

地区内のぶどう園で、ハクビシンによる食害やイノシシによる根の掘り起こしが目につくようになってきた。現時点での被害額は大きくないが、南山麓友の会会員自らが鳥獣管理士の資格を取得し、被害防止に向け状況調査や農家に対する研修、指導を行っている。山中の被害はトレッキング部メンバーが山を点検することで素早い対応が可能であり、きめ細やかな活動は地元農家や来訪者からも喜ばれている。

また、宇都宮大学農学部附属里山科学センターと連携、鳥獣管理士を目指す後進の育成にも協力している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 里山の荒廃を防ぎ豊かな自然を確保する地道な手入れ

南山麓友の会の根幹となる取り組みで、平成15年以降太平山南山麓の樹木の伐採や片付け、桜や椿の苗木植え付けや刈り込み、遊歩道の管理、大中寺等の寺社仏閣周辺の清掃、かかしの里周辺の草刈り、花菖蒲やロウバイの植栽、アジサイの剪定、ホタルの里の保全など、地域全体に渡る広範囲で多様な環境美化・緑化活動に取り組んでいる。



写真5 伐採の様子

(2) 来場者にも喜ばれる会員手作りの環境美化活動

ハイキングコースには、案内標識が24カ所、山頂標識が2カ所、「かかしの里」周辺や太平山山中にはいすやテーブルが多数置かれ、来訪者に安心を提供している。これらはすべて廃材を利用し会員が手作りした。また、週に1回以上の枯れ枝処理や下草刈り、倒木の片付けなど、コースの環境美化も行っている。

清水寺近くには、手作りした総ヒノキ造り・竹屋根のあずまやがあり、西山田の田園風景が一望でき、来訪者の良い休憩所になっている。

(3) ボランティアによるトレッキングガイドサービス

地域の魅力を知ってもらおうと、南山麓友の会会員が地域の自然や史跡・名所について無料ガイドを行っている。春と秋に開催する太平山系トレッキングには毎回30名程が参加し、リピーターも増えている。平成26年度には新たなコースを開発し、リピーターを飽きさせない工夫も行っている。

(4) 農地・水・環境保全活動との連携（耕作放棄地の解消、ホタルが飛ぶ自然環境の回復）

3.6haの耕作放棄地を環境保全会と連携し再生している。

また、再びホタルが飛び交うような川の流れを取り戻そうと、コンクリート側溝の堀さらいも敢えて砂利や泥を少し残しながら行ったり、生態系保全に適した草刈り時期を検討したりと、カワニナが生息できる環境づくりを進めている。自治会には洗剤を流さないよう声かけしたり、川の清掃活動に取り組んだ結果、最近ではホタルの飛ぶ姿が見られるようになった。

(5) オーナー制度による耕作放棄地対策と都市農村交流

平成19年、耕作放棄地を活用して都市農村交流を進めようとオーナー制度の導入に踏み切った。西山田オリジナルの特徴的で面白い取組とするため「大中寺の七不思議」になぞらえて7つの作物を収穫できる「ななふしぎおおひらの七富賜技体験」を考案・実施しており、0.6haの耕作放棄地が活用されている。



写真6 体験の様子

ジャガイモや大根の植え付け・収穫など、近隣農家や農業団体の協力を得て、年間を通して7つの農業体験と旬の味覚を楽しめる内容となっている。また、農作物が不作の時に備え、代替品目を1から2品用意するなどの配慮もしている。

オーナー制度による利益は少ないものの、南山麓友の会の重要な収入源となり、参加するオーナーが末永く西山田地区を愛し応援団となってくれることに期待を寄せている。平成26年度は23組がオーナーとなる予定で小学生を持つ家族の割合が高い。年間1組2名分15,000円で、3人目以降は食事代の追加で参加できるなど気軽に楽しめる設定としている。

(6) 新たな都市農村交流の検討

年々増加するハイキング客の地域内回遊を促進し、地域経済を活性化していく仕組みを検討しており、西山田地区ならではのグリーンツーリズムの展開もその一つだ。

西山田地区の環境に触れ大平のファンとなる人も増えており、地域内への来訪者は平成18年334,700名から平成25年422,808名に拡大し、地域は来訪者の増加で経済が潤い、来訪者は地域住民との交流により心が潤うことで、互いに元気を交換している。

(7) 地域の元気とやすらぎの空間

南山麓友の会が常駐するかかしの里は、地域内外の人が気軽に立ち寄りコミュニティの場でもあり、集まれば話が始まり、そこで新しいアイデアが生まれ、新たな活動への一歩となるなど、地域の元気や訪れる人々のやすらぎにつながっている。